

中国語話者における指示詞コ・ソ・アの言語転移

迫田 久美子

Language Transfer in Learning Japanese Demonstratives by Chinese Speakers

SAKODA, Kumiko

1 序論

日本人：日本では、お見合いはレストランでご飯を食べながらするのよ。

学習者：私の国でも*これ(それ)はありますよ。

日本語学習者にとって、指示詞コ・ソ・アは入門期に導入されるにもかかわらず、中級レベル以上になっても誤用が観察される。誤用の種類や量も学習レベルや母語によって複雑な様相を呈している。上記の例は、一般的にはソ系指示詞を使用する場合に、コ系指示詞を使用し誤用になっている例である。本研究では、中国語話者・韓国語話者・英語話者を比較した場合、上記のような指示詞の誤用が、中国語話者に見られる特徴的な誤用であること、それが中国語の母語の影響である可能性が高いことを明らかにする。

2 これまでの研究と問題点

2-1 言語転移に関する研究

言語転移の研究は、これまで学習者の母語(第一言語)がどのように目標言語(第二言語)の習得に影響を及ぼすか、という観点で行われてきた。対照分析研究が盛んに行われていた1950年代、誤用は母語と目標言語の言語的相違が起因すると考えられ、学習者の母語が「干渉(interference)」するとみなされた。しかし、その後、同種の誤用が異なった母語話者から出現し、母語干渉の影響は疑問視されるようになった(Selinker, 1972)。しかし、誤用分析の研究が盛んになり、語順や音韻など、学習者の母語からの影響であろうと見なされる例も依然として観察された。1970年代以降、誤用は学習者の目標言語に対する仮説検証の現れであると考えられ(Corder, 1981)、母語の干渉と否定的に考えるのではなく借用(borrowing)と肯定的に捉える見解が示された(Corder, 1983)。さらに、言語転移と

いう用語の定義は、誤用分析が盛んであった当初学習者の母語が目標言語の習得に影響を与えることを意味したが、Odlin(1986: 27)によって、「目標言語の習得にそれ依然に習得した言語(母語だけでなく、その後で習得した外国語も含め)が影響することである」とする新たな定義も示された。また、Kellerman & Sharwood Smith(1986)は、言語転移を回避・借用なども含め、目標言語に対する影響だけでなく、目標言語から母語にも影響を与える現象であると捉え、crosslinguistic influence と称している。

言語転移の分類には、一般的に第二言語学習者の母語と目標言語の類似点が習得にプラスに作用する場合の「正の転移(positive transfer)」、相違点がマイナスに作用する場合の「負の転移(negative transfer)」がある。Odlin(1989)、Ringbom(1987)等は、さらに下位分類を設定している。

本研究では、言語転移の範囲を第二言語学習者の母語からの目標言語への影響の枠内に設定し、言語間の相違点がどのようにマイナスに影響するのかという「負の転移」に焦点をあてることとする。従って以下、本研究では言語転移の用語は「負の言語転移」を意味する。

Dulay & Burt(1973)、Larsen-Freeman(1975)等は、実験的調査を行って母語の違いによる習得の差異はないことを主張している。Dulay & Burt(1973)は、スペイン語話者の子供の英語習得を調査した結果、母語干渉(つまり負の言語転移)の誤用の割合は、全体の3%しかなかったと報告している。最近の研究では、Heilenman & McDonald(1994)がフランス語学習者が母語のストラテジーを使うか、目標言語のストラテジーを使うかの調査を行い、ほとんどのレベルで言語転移が見られなかったことを報告している。

一方、言語転移が見られたという報告も多く提出されている。Taylor(1875)はスペイン語話者の英作文から、Gass(1979, 1983)は関係節の調査から

言語転移が見られたことを報告している。また、Tran-Chi-Chan (1975) は、中国語話者の英語習得の調査から全体の51%の誤用が言語転移であるという結果を報告している。

Stockwell, Bowen, & Martin (1965) は、母語と目標言語間の相違の程度から学習困難度の階層表を作成している。それによると、最も学習が困難とされるのは、母語で1つの項目（例えば英語では「that」が、目標言語で2つ以上の項目（例えば日本語では「それ・あれ」）に分化している場合であると述べている。

2-2 指示詞の第二言語習得研究

指示詞の第二言語習得研究には、申 (1985)、新村(1992)、迫田(1992,1993)、Hayashi & Niimura (1994)、迫田 (1996) がある。申 (1985) は、韓国語話者92人について学習開始年齢と学習期間が習得にどの程度影響するかを穴埋めテストを用いて調査し、来日年齢と滞在期間が習得に影響を与えることを述べている。彼女は結果の中で、ソとアの使い分けの誤答率が高いことについて、韓国語と日本語の指示詞のずれが誤用の原因であろうと述べている。

新村 (1992)、Hayashi & Niimura (1994) は、アメリカ在住の日本語学習者（中級・上級レベル）への穴埋めテストから、指示詞の習得は上級レベルでも難しいこと、特にソとアの使い分けが学習困難であることを提示している。

迫田 (1992、1993) は、母語の指示体系が英語 (this / that) や中国語 (這/那) のように二項対立指示体系の学習者とタガログ語 (ito / iyan / iyon) や韓国語 (i / ku / ce) のように三項対立指示体系の指示詞体系の学習者に分け、それぞれ初級・中級・上級レベルに分類して60人に対話調査を行い、話し言葉における指示詞の習得研究を行った。その結果、母語の違いにかかわらずソとアの使い分けが困難であること、二項と三項対立の指示体系では、三項対立指示体系の母語の学習者のほうが習得が進んでいることが明らかになった。

これまでの研究の申 (1985) と新村 (1992)、Hayashi & Niimura (1994) では、対象が1カ国の学習者であり、いずれもソとアの使い分けの誤用が多いことの理由を母語との違い、つまり母語からの言語転移としている。しかし、韓国人もアメリカ

人も同種の誤用が多いことは、迫田 (1992、1993) も示しているように、母語の違いにかかわらずその用法の習得が困難であることを示していると言える。

また、迫田 (1992、1993) では、二項と三項対立の指示体系の違いがソの習得に影響していると述べているが、なぜそうなのか、具体的な誤用内容の分析に基づく言及がなされていない。

2-3 問題点

これまで言語転移と指示詞の習得研究に関する先行研究を概観してきたが、ここで問題点を整理する。

習得研究における言語転移の議論が現在まで続けられている状況の背景には、Dulay & Burt (1973) を初めとして、Heilenman & McDonald (1994)、申(1985)、新村(1992)、Hayashi & Niimura(1994)等、多くの研究が1カ国だけの学習者を対象とした調査の結果からその誤用を短絡的に母語と目標言語との相違点に帰結させている点がある。さらに加えて、それぞれの結果（誤用）を言語転移とするか、習得過程の一般的な誤用とするかの判定が明確でないことが挙げられる。また、Bailey, Madden and Krashen (1974)、Tran-Chi-Chan(1975)、Hayashi & Niimura (1994) 等、誤用の頻度や割合に焦点をあてた研究が多く、誤用の内容に関する細部の検討がなされていない点も問題であると言える。

以上をまとめると、言語転移に関する研究の問題点として、(1)の2点が挙げられる。

- (1) a. 誤用の原因を母語からの言語転移と設定する基準が曖昧である。
- b. 誤用の頻度や割合に焦点があてられ、誤用内容の検討が不十分である。

上記の問題点をふまえて、本研究では中国語話者の特徴的な誤用に関する仮説を立て、その種の誤用が真に中国語話者特有の誤用と言えるかどうか、中国語話者・韓国語話者・英語話者を対象として比較調査する。さらに、その誤用の背景に中国語からの言語転移の可能性が高いことを示し、迫田 (1992、1993) で示した結果に新たな知見を加えたいと考える。本研究で扱う指示詞の用法は、眼前の事物を指す用法（現場指示用法）ではなく、談話文脈に導入された内容を指す用法（文脈指示用法）を対象とする。

3 中国語話者の指示詞コ・ソ・アの使用傾向

3-1 日本語学習者に見られる誤用パターン

指示詞コ・ソ・アの誤用といっても、コの誤用としては、コとすべき場合にソを使用する場合とアを使用する場合があります、6通りの誤用パターンの可能性が考えられる。迫田（1996）の3年間の縦断研究（特定の学習者に対して長期に渡って調査を行う研究）によると、学習者に観察された誤用パターンは、(2)の5通りが示されている。（「ソ→コ」は、ソを使用すべき場合にコを使用した誤用を、（ ）内は正答を、NSは日本人、RY、CH、YNは日本語学習者を表している。）

(2)指示詞の誤用パターン（迫田、1996:68）

a. ソ→コの誤用

NS：日本のお見合いはレストランでご飯を食べながらするよ

RY：中国でも*これ（それ）はありますよ

b. ア→コの誤用

NS：昨日テレビで見たけど、韓国の学生運動すごいですね

CH：ほんとは*これ（あんな）じゃないです

c. コ→ソの誤用

YN：韓国には*そう（こう）という言葉があります、天才は99%の努力と1%の才能だって

d. ア→ソの誤用

CH：[自分の母は]日本に来てから考えたら*そんな（あんな）いいお母さん、いなかったと思う

e. ソ→アの誤用

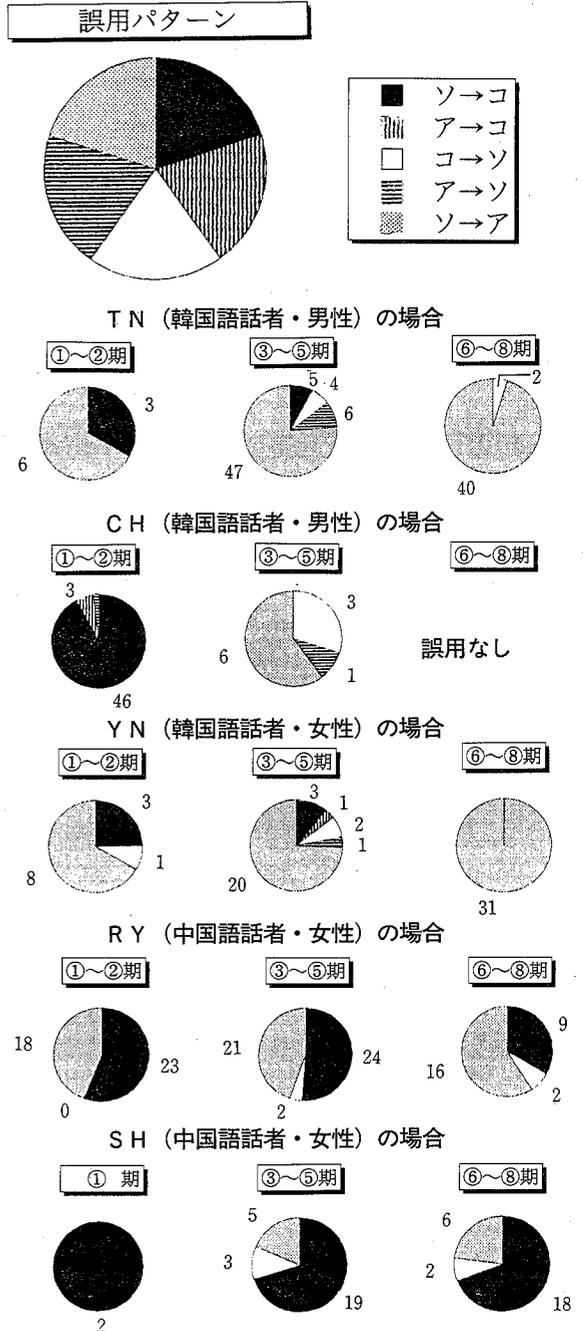
YN：沖縄から来た女の人は、大きなオートバイ乗るんですよ、大きいですよ、オートバイが大きい、*あの（その）女の子も大きい

これらの誤用は、学習者に一律の割合で現れるのではなく、典型的にはa. ソ→コの誤用とe. ソ→アの誤用が最も多い。つまり、ソの指示詞を使用すべき場合にコやアを使用してしまう場合であり、一般的にはソの誤用と考えられる。これらの誤用が3

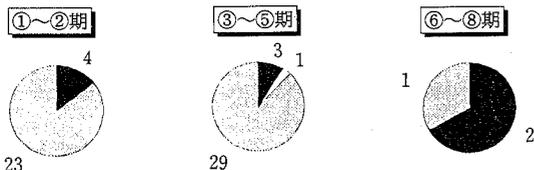
年間の学習経緯によってどのように推移するのかわを示したのが、(3)の図である。（①～⑧は、3年間に8期に分けた分類を示し、図はそれを大まかに初期・中期・後期の三段階に分けて示してある。数値は誤用の実数を表す。）

(3)指示詞コ・ソ・アの誤用パターンの推移

(同上：69)



LL (中国語話者・女性) の場合



この推移から、ソ→コの誤用が初期ではすべての学習者に観察されるが、後期になると韓国語話者には全く見られなくなるのに対し、中国語話者には依然として出現していることが分かる。実際に観察された誤用としては、(4)のような例がある。(RY、SHは学習者。)

- (4)a. NS: 親は帰って来いって言わない?
 RY: 今さら*こんな (そんな) 事もう言わない (RY、学習3年目)
- b. NS: 食事のときのしぐさ、同じ?
 SH: おなじ
 NS: 日本、「いただきます」とか
 SH: あ、*これ (それ) ない、しない、みんなバラバラです。
 (SH、学習3年目)

これらは、相手が発話した内容を受けて、それを指示する用法であり、一般的には日本人の場合はソ系指示詞が使用されるべき用法である。韓国語話者ではこの用法に関しては、(5)のようにソが使用される場合が多い。(TNは、韓国語話者。)

- (5) NS: アルバイトしながら勉強するのは難しい。
 TN: はい、ほんと、それは難しいです
 (TN、学習2年目)

このように見てくると、相手が発話した内容を対象として指示する場合にコ系指示詞を使用する誤用は、中国語話者に特有に見られるのではないかと、いう仮説が立てられる。迫田 (1996) では、中国語話者3名の結果であり、韓国語話者3名との比較であるため、この結果だけでは一般的な中国語話者の誤用、また中国語話者特有の誤用と断定はできない。そこで、この仮説を検証するためには、より多くの他の中国語話者を、また韓国語話者以外の学習者を対象として加えて調査することが必要である。さらに迫田 (1992、1993) で示した二項対立と三項対立の学習者の習得に差があるかという問題を解決する

ためには、中国語と同じ二項対立指示体系の母語の学習者を対象とすることが必要である。

4 コ系とソ系指示詞の使い分けの調査

4-1 調査の目的

前節で検討した中国語話者の誤用が、他の中国語話者にも一般的な傾向であるのか、他言語の日本語学習者と比べて中国語話者特有の誤用であるのかについて明らかにしなければならない。そこで、(6)の仮説を検証することを目的としてコ系とソ系指示詞の使い分けに関する調査を行う。

- (6)中国語話者は韓国語話者や英語話者に比べて、中級レベル以上になっても相手の発話内容を受けて指示するソ系文脈指示用法において、コ系指示詞をより多く使用するであろう。

4-2 調査の対象と方法

調査は、日本語の能力が中級・上級レベルで、日本における日本語学習歴・滞在歴がそれぞれ1年以上の大学および語学学校の留学生・研究生を対象とした¹⁾。概要は(7)の通りである。

(7)調査対象者の概要

	中国語話者	韓国語話者	英語話者	日本人
人数	20名	20名	20名	20名
レベル [†]	(中8/上12)	(中9/上11)	(中7/上13)	
年齢	20~40代	20~40代	20~40代	20~40代
学習歴 [‡]	2.02年	2.03年	2.31年	
滞日歴	2.31年	2.31年	1.64年	

†中=中級レベル、上=上級レベルの人数を表す

‡学習歴および滞日歴ともに各グループの平均を表す

対話相手が談話に登場させた内容を指示するソ系文脈指示用法²⁾の会話文10文、および調査の目的をさとられない為のダミー用の会話文10文、計20文を作成し、その会話の中の指示詞の使用が正しいかどうかの判断を○×で解答させた。調査対象となったソ系文脈指示用法の会話文は、(8)のようにソ系指示詞で指す場合である。対象の会話文10文のうち5文はソ系指示詞を使用し(日本語母語話者では○と反応することが期待される)、残りは5文はコ系指示詞を使用して(日本語母語話者は×と反応することが期待される)問題文を作成した(資料参照)。調

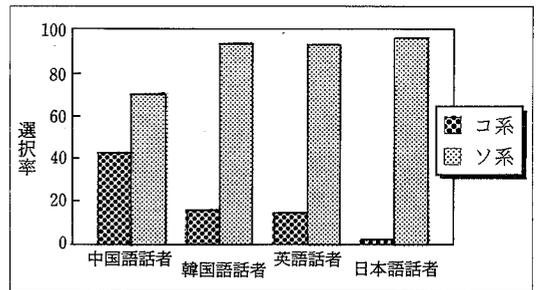
査は、授業または面接によって行い、所要時間は10分程度であった。

- (8)コ系とソ系指示詞の使い分け調査の問題文の例
- a. A: お金と時間とどちらが大切だと思いますか?
 B: それは難しい質問ですね。私ならどちらもほしいけど。 (○)
- b. A: 今日、大学の英語の授業でテストがあること、知ってる?
 B: えっ、これは知らない。だれから聞いたの? (×)

4-3 調査の結果と考察

被験者毎にそれぞれの問題に○を記した数その文における指示詞の選択数とした。この選択数に角変換を行った後、中国語話者・韓国語話者・英語話者の母語要因(3)×コ系とソ系の指示詞要因(2)の2要因分散分析を行った。その結果、指示詞の交互作用 ($F(2, 57) = 231.0 p < .001$) と、母語と指示詞の交互作用 ($F(2, 57) = 18.3 p < .001$) が有意であった。交互作用が有意であったので、コ系およびソ系の選択のそれぞれについて、母語要因に関する単純主効果の検定を行った。その結果、コ系 ($F(2, 114) = 13.4 p < .001$)、ソ系 ($F(2, 114) = 10.3 p < .001$) のいずれにおいても、母語の主効果が有意であった。ライアン法による多重比較を行ったところ、コ系指示詞の選択に関しては中国語話者と韓国語話者の差が有意 ($p < .001$)、中国語話者と英語話者の差が有意 ($p < .001$) であった。また、ソ系指示詞の選択に関しても、中国語話者と韓国語話者の差が有意 ($p < .001$)、中国語話者と英語話者の差が有意 ($p < .001$) であった。以上の結果から、中国語話者、韓国語話者、英語話者ではコとソの指示詞選択に関して差があることが認められた。つまり、ソ系文脈指示用法において中国語話者は韓国語話者や英語話者に比べ、コ系指示詞を選択する傾向があり、仮説は認められたと言える。(9)は中国語話者・韓国語話者・英語話者・日本語母語話者のコとソの選択数を割合で示したものである。

(9)日本語学習者と日本語母語話者のコとソの選択率



調査の結果から、対話相手が談話に導入した内容を指示するソ系文脈指示用法においてコ系指示詞を適用する誤用は、韓国語話者や英語話者に比べると、中国語話者に多いことが考えられる。つまり、迫田(1996)で示された中国語話者の誤用は、特定の学習者にだけ見られるのではなく、韓国語話者や英語話者と比べると、一般的な中国語話者の誤用であると言える。

次に、英語と中国語は共に二項対立指示体系を有する言語であるが、英語話者は中国語話者とは異なった結果を示し、母語の指示体系がともに二項対立であっても、英語話者は韓国語話者と同様の結果となっている。このことから、中国語話者と英語話者の習得過程は、少なくともコ系指示詞に関しては異なっていることが推測される。

では、なぜ中国語話者はコ系指示詞を選択するのであろうか。同時に、なぜ英語話者はコ系指示詞を選択しないのであろうか。この問題を解明するために、次節では、日本語の指示詞と対照させながら学習者の母語である中国語・韓国語・英語の指示詞とその指示領域を検討する。

5 中国語・韓国語・英語の指示詞と日本語指示詞

5-1 指示詞と指示領域

吉田(1980)は、世界の479の言語の指示詞がどのように空間を分けるかという観点で、指示詞を研究している。研究によると、2分型が47.5%で最も多く、次いで3分型が35.1%であり、世界の8割以上の言語は二項対立(2分型)か、三項対立(3分型)の指示体系で占められている。前述したように、中国語と英語の指示詞は二項対立であり、韓国語と日本語指示詞は三項対立である³。

二項対立指示体系は、遠近によって区別される2

つの指示詞から構成されており、三項対立指示体系は、話し手中心か聞き手中心かの基準でいくつかの種類があり、同じ三項対立といっても同様の対立関係であるとは言えない。ここでは、韓国語・英語・中国語の指示詞を概観し、会話に導入されたことから指示する用法に限って、日本語の指示詞との違いについて述べることにする。

(10)は、それぞれの言語の指示詞を表にしたものである。

(10)中国語・英語・韓国語・日本語の指示詞

	近 称	遠 称
中国語	這	那
英 語	this	that

	近称	中称	遠称
韓国語	i	ku	ce
日本語	コ	ソ	ア

まず、韓国語の指示詞について述べる。韓国語と日本語の指示詞は、ほとんど形態的に対応しているだけでなく、上記の表を見ても分かるように、近称・中称・遠称の概念もほぼ同様である。実際の会話において物理的距離だけでなく、心理的距離で指示詞が使い分けられる点も同様である。

しかし、いくつかの相違点がある。

まず第一点は、現場にある物でも一度言語的文脈に登場させたら、韓国語では中称の ku 系で指すことが可能である。第二点は、日本語ではア系指示詞が用いられる話し手と聞き手の共有知識や話し手の記憶の概念などの対象に対して、韓国語では(11)に示されるように遠称の ce 系ではなく、中称の ku 系が使用される。

(11) a. あれを持ってきてくれ。

ku (*ce /*i) gotjom kattajuge.

(申、1985:104)

b. A:きのう金君に会った。あの人は随分変わった人だね。

ecey kim kwun-ul manna-ss-ta.

ku salam-un sangtanghi syaktalu-n salamaiya.

B: あいつは変人ですよ。

ku nom-un koyca-i-pnita.

(宋、1991:145)

一般的に韓国語と日本語の指示詞は、その他の言語現象とともに互いに全く対応していると考えられているが、上記で示した通り、日本語のア系指示詞の領域において中称の ku 系が多用され、韓国語の文脈指示用法では ku 系の汎用性が高いと言える。

次に、英語について見てみる。

英語の指示詞は、話し手と指示対象の物理的・心理的距離を基準に使い分けられる点は同じであるが、英語は聞き手の存在を考慮に入れず、話し手を基準にした近接性 (proximity) によって使い分けられる点が異なっている (Quirk et al., 1985)。談話に導入された事物や内容を指す用法では、this を用いると話し手の視点として強い印象を与えるため、that の方が無標として一般的に使用される (Lyons, 1977) ((12) a. 参照)。従って、相手が導入した内容を指示する日本語のソ系文脈指示用法では、this よりも that が用いられる ((12) b. 参照)。また、日本語の話し手と聞き手の双方にとっての旧情報、つまり、“both of us know” も that で表される ((12) c. 参照)。

(12) a. ジョンとメアリーとトムとキティーは、この順序で部屋に入ってきた。(筆者訳)

John, Mary, Tom, and Kitty came in

*this / that order. (千葉・村杉、1987:134)

b. A: お金と時間とどちらがほしい?

B: それは難しい質問ね。

That's a difficult question.

(筆者作例)

c. それは人を、空気はきれいで土地は広々としているという、アノ素晴らしい気持ちにさせてくれる。

(訳 安藤、1986:220、下線 筆者)

It gives you that great feeling of clean air and open spaces.

(Leech & Svartvik, 1979:59)

英語の指示詞では、談話に導入された前述の内容に関して多くの場合 this よりも that の方が無標として多用されており、日本語のコ・ソ・アの領域において this に比べて that の方が汎用性が高いことが分かった。(対話相手が導入した前述内容を this で指す場合もあるが、それについては 5-2 で触れる。)

者のコ系指示詞の多用という現象は、この視点に起因している可能性が高いと考える。つまり、中国語話者が日本語において相手が導入した内容をコ系で指してしまうのは、この包摂的視点をとっているためであろうと考えられる。

6 結論

2節で提示した先行研究の問題点を踏まえ、本研究では言語転移の判定を複数の母語話者を対象として調査を行った。また、誤用の傾向を調べ、その内容の分析を行った上で仮説を立てて検証を行うというプロセスで研究を進めた。

本研究の目的は、中国語話者・韓国語話者・英語話者を比較した場合、相手が談話に導入した対象をソ系ではなくコ系で指示する誤用が、中国語話者に見られる特徴的な誤用であること、それが中国語の母語の影響である可能性が高いことを明らかにすることであった。

中級レベル以上の中国語話者・韓国語話者・英語話者を対象として文法判断テストを行った結果、前述の内容を指示するソ系文脈指示用法において、中国語話者は韓国語話者・英語話者に比べてコ系指示詞を選択する割合が高く、ソ系を使用すべき場合にコ系を使用してしまう誤用が中国語話者特有の誤用であることが明らかになった。

さらに、その原因を探るために韓国語・英語・中国語の指示詞とその領域や用法について検討した。その結果、中国語は相手が導入した内容でも客観的な捉え方ではなく、話し手が相手を取り込んで「われわれ」の包摂的視点をとって、より一層強調して指す近称の這系が多用されること、その視点が日本語の指示詞の使用にも影響して、近称のコ系が多用されているのであろうと考えられることを述べた。つまり、中国語話者のコ系指示詞の多用は、中国語の指示詞からの言語転移の可能性を示唆していると言える。

本研究の結果は、さらに二項対立指示体系のグループである中国語話者と英語話者の習得についても新たな知見もたらすこととなった。2-1の先行研究で Stocckwell, Bowen, & Martin (1965) は、母語と目標言語間の相違で最も学習が困難とされるのは、母語で1つの項目が、目標言語で2つ以上の項目に分化している場合であると述べている。中国語も英語も二項対立指示体系の言語であるが、その学

習者達が日本語の三項指示体系を学習するのは最も学習が困難とされるケースであると思われる。しかしながら、本研究の結果は中国語話者と英語話者の間においても指示詞の使用の違いが示され、同じ二項対立指示体系のグループの学習者でも指示詞の習得のプロセスが異なっていること、指示体系の個々の領域の違いが習得に影響している可能性が高いことを示唆している。

今回の研究結果は、迫田 (1992, 1993) が二項対立指示体系と三項対立指示体系で得た結果について新たな見解を提示することができた。学習者の母語指示体系を特定し、指示領域の詳細な検討を踏まえて調査を行うことの重要性を示したと言える。今後の計画として、三項対立指示体系を有する言語で、近称の汎用性が高い言語を選び出し、その言語の母語話者を対象としてさらに調査を続けたい。

付記：本研究は、文部省科学研究費補助金基盤研究 (A) 第二言語としての日本語の習得に関する総合研究 (課題番号08308019 研究代表者カッケンブッシュ・寛子) の研究の一環として行ったものである。

注

- 1 レベル判定に関しては、原則として大学および語学学校に在籍するクラスに従い、担当教師の診断を参考にした。対象となった学生の教育機関は、広島大学・広島修道大学・広島YMCA国際ビジネス専門学校日本語学科であった。
- 2 ソ系文脈指示用法には、対話相手が談話に導入した事物を指す場合だけでなく、話し手自身が談話に導入した事物を指す次のような用法もある。「赤い箱があったのでその箱に入れた」(堀口, 1990: 68)
- 3 二項対立指示体系を有する言語は他に、ドイツ語、ヒンディ語、ペルシャ語、インドネシア語などがあり、三項対立指示体系を有する言語は、タイ語、タミール語、シンハラ語などがある。
- 4 指示対象に対して話し手の思い入れが強い場合や特に強調した場合などは、次のようにコ系や *this* が使用される。

A: 今、飢えて死んでいく子供が大勢いるんですよ。

B: これは、重要な問題です。

This is a serious problem. (筆者 作例)

参考文献

<和文>

安藤 貞雄 (1986) 『英語の論理・日本語の論理』
大修館

神尾 昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論』大修館

木村 英樹 (1992) 「中国語指示詞の「遠近」対立
について－「コソア」との対照を兼ねて」『日本
語と中国語の対照研究論文集 (上)』大河内康憲
(編) pp.137-151. くろしお出版

高 麗雅 (1986) 「指示詞『コ・ソ・ア』につい
ての一考察」『日本語教育』60号 pp.221-227.

迫田久美子 (1992) 「日本語学習者による指示詞
「コ・ソ・ア」の習得に関する研究」『平成3年
度広島大学大学院教育学研究科修士論文抄』pp.
199-206.

迫田久美子 (1993) 「話し言葉におけるコ・ソ・ア
の中間言語研究」『日本語教育』81号 pp.67-81.

迫田久美子 (1996) 「指示詞コ・ソ・アに関する中
間言語の形成過程－対話調査に基づく縦断的研究
に基づいて－」『日本語教育』89号 pp.64-75.

申 環恵 (1985) 「第二言語としての日本語習得
における『コソア』の問題」『言語の世界』2巻
2号 pp.97-111.

宋 晚翼 (1991) 「日本語教育のための日韓指示
詞の対照研究」『日本語教育』75号 pp.136-152.

千葉 修司・村杉恵子 (1987) 「指示詞についての
日英語の比較」『津田塾大学紀要』19号 pp.111-
153.

張 掠玲 (1986) 「日中両国における指示詞の研
究－<コ・ソ>系と<這・那>系の対照を中心と
して」『文献探究』17号 pp.23-32.

新村 朋美 (1992) 「指示詞の習得－日英語の指示
詞の習得の対照研究」『早稲田大学日本語研究教
育センター』第14巻 pp.36-59.

堀口 和吉 (1990) 「指示詞コ・ソ・アの表現」『日
本語学』vol.9. 3月号 pp.59-70.

吉田 集而 (1990) 「指示詞に見られる空間分割の
類型とその普遍性」『国立民俗学博物館研究報告』
5巻4号 pp.883-959.

<英文>

Bailey, N., C. Madden & S. Krashen (1974) Is there a
“natural sequence” in adult second language
learning? *Language Learning* 24/2. pp.235-243.

Corder, P. (1981) *Error Analysis and Interlanguage*.

Oxford University Press.

Corder, P. (1983) A role for the mother tongue. In
S. Gass and L. Selinker (eds.) *Language Transfer
in Language Learning*. pp.79-85. Newbury House.

Dulay, H. & M. Burt (1973) Should we teach
children syntax? *Language Learning* 23/2,
pp.245-258.

Gass, S. (1979) Language transfer and universal
grammatical relations. *Language Learning* 29/3,
pp.327-344.

Gass, S. & L. Selinker (eds.) (1983) *Language
Transfer in Language Learning*. Newbury
House.

Hayashi, B. & T. Niimura (1994) English and
Japanese Demonstratives: A Contrastive Study of
Second Language Acquisition. *Issues in Appli-
ed Linguistics* 5/2, pp.327-351.

Heilenman, K. & J. McDonald (1994) Processing
strategies in L2 learners of French: The role of
transfer. *Language Learning* 43/4, pp.507-557.

Kellerman, E. & M. Sharwood Smith (eds.) (1986)
*Cross-linguistic influence in Second Language
Acquisition*. Pergamon.

Larsen-Freeman, D. (1975) The acquisition of
grammatical morphemes by adult ESL students.
TESOL Quarterly 9/4, pp.409-419.

Leech, G. & J. Svartvik (1979) *A communicative
Grammar of English*. Longman.

Lyons, J. (1977) *Semantics: 2*. Cambridge Universi-
ty Press.

Odlin, T. (1989) *Language Transfer*. Cambridge
University Press.

Quirk, R. et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of
English Language*. Longman.

Ringbom, H. (1987) *The Role of the First Language
in Foreign Language Learning*. Multilingual
Matters.

Selinker, L. (1972) Interlanguage. *IRAL* 10, pp.209
-230.

Stockwell, R., J. Bowen, & J. Martin (1965) *The
Grammatical Structures of English and Spanish*.
Chicago University Press.

Tran-Chi-Chan (1975) Error analysis, contrastive
analysis and students' perceptions: A study of
difficulty in second language learning. *IRAL* 13.
pp.119-143.

資料（調査問題文－対象文のみ－）

- 1) A: 両親が早く結婚しなさいって言わない?
B: こんなことは、もうあまり言わない。
- 2) A: 卒業したらどうするの、国に帰るの?
B: それはまだ分からない、両親と話してないから。
- 3) A: 今日、大学の英語の授業でテストがあること知ってる?
B: えっ、これは知らない。だれから聞いたの?
- 4) A: お金と時間とどちらが大切だと思いますか?
B: それはむしろかしい質問ですね。私ならどちらもほしいけど。
- 5) A: 日本では、お見合いはレストランで食事をしながらする人が多いのよ。
B: 私の国でも、これはありますよ。
- 6) A: 日本のカラオケと中国のカラオケと同じように使いますか?
B: これはわかりまん。日本ではカラオケに行つたことがないから。
- 7) A: 日本人はイエスとノーがはっきり分からない場合が多いでしょう?
B: はい、それは私たち外国人にとって、大きな問題です。
- 8) A: 中国料理と韓国料理とどちらがからいと思う?
B: そうね、これはよく知らないけど、韓国のほうがしら。
- 9) A: あなたの国では、バレンタイン・デーにチョコレートをあげたりしますか?
B: そんな習慣はありません。日本だけじゃないですか。
- 10) A: 天ぷらとすいかをいっしょに食べると、おなかがいたくなるよ。
B: え、それはほんとうですか?
-